



# 和 ～心をつなぐ～

令和4年9月30日

第4号



## トイレづくりに見た「真の支援」

和光中学校では、毎月「道徳の日」にさまざまな人の生き方や社会情勢について話を聞き、自分自身の心と向き合いじっくり考える時間をもっています。

9月(後半)は、遠く離れた東ティモール民主共和国で、ある日本企業が国連のユニセフと協力して行った13年に渡る支援活動を知ることによって『真の支援』とは何なのかについて考えました。



何人かの感想を紹介します。

〔※ 裏面：放送内容〕

### ☆ 1年生 ☆

- トイレのない国の人々にトイレを与えたのではなく、トイレの作り方を教えたということがとてもすごいと思います。貧しい生活をしている地域の人々に自分たちの力で生活を豊かにする方法を伝えることが、援助なんだと思います。
- トイレを現地に贈って設置すれば使えるのに作り方から教えているのは、本当にそこに住んでいる人たちの生活の環境を改善しようとしているからだ分かる。

### ☆ 2年生 ☆

- 私は、誰かが困っていたり悩んでいたときに、手助けや協力をしたことがあります。そこまでは同じだけど、ユニセフなどの団体はその後のことも考え、必死に人助けをしているのだと気づきました。僕にできることは少ないですが、周りの人を助けるということは続けていきます。
- 支援というのは、お金を渡したり物を寄付したりするだけだと思っていたけど、自分たちで作ることですべて支援を受けなくてもよくなるように考えることが大事だと思った。

### ☆ 3年生 ☆

- 「真の支援」とは、ただ自己満足にならず、相手のこともしっかり思って、相手を成長させることだと思った。
- ただ募金をすれば発展途上国の人々は救われると思っていましたが、そうではなく、その人たちが本当に必要としていることはなにかを考えることが大切です。ユニセフの人たちやそれに協力する企業の人たちが親身になって自分のことのように問題を考えているのがすごかったです。
- トイレトペーパーが1個売れるたびに自分たちの利益をユニセフに送るとするのはすごいと思いました。そのおかげで5歳未満で死亡する人の割合が25%も減少したのもすごいことです。

### ★保護者の皆様へ

お子様と意見の交流をして、ぜひ感想などをお気軽にお寄せください。

切り取り線

保護者通信欄（お子様を通じて担任へお渡しください。）

私たちの日常生活の中で当たり前にあるものの一つが「トイレ」です。ボタンを押せば水が流れてきて、常に清潔を保ってくれるトイレですが、皆さん、想像してみてください。もし、私たちの生活からこの便利なトイレがなくなってしまうらどうなるでしょうか。今日は、小さなアジアの国「東ティモール民主共和国」で、ある日本の会社が行った「支援活動」について考えます。

東ティモール民主共和国は、独立してからたった20年というアジアで最も若い国です。約460年間、外国の国々に占領され、戦いの中で多くの人々が命を失いました。現在の人口は、香川県の人口より少し多い130万人。今も貧しい経済状況の中にあります。そんな国を、発展途上国の子どもたちのために医療や教育の援助を行う国連の特別機関である「ユニセフ（国連児童基金）」と、ある日本の会社が13年に渡って援助を続けてきました。

この会社は、トイレトーパーを製造する製紙会社です。ユニセフと協力して、2008年から2020年までの13年間で「22,000の水洗トイレ」を作ってきました。その援助の仕組みは、『『トイレトーパー1個』が売れるたびに、その利益の一部がユニセフへと送られる。ユニセフは、そのお金でトイレを作るために必要な材料を買う。そして、東ティモールにいるユニセフの職員が村人と力を合わせてトイレを作る。』というものです。

2008年のこと。ある村の68の家に、初めて水洗トイレが作られました。山から引いたわき水を利用したものでした。5人の子の父親であるカルロスは次のように語りました。「トイレがなかった頃、日が暮れてから子どもたちを遠く離れた草むらへ行かせるのはとても危険だった。そのため、やむを得ず家の近くで用を足すよう言うしかなかった。糞尿(ふんにょう)が家の周りにあるため衛生状態が悪く、子どもたちの健康が何より心配だった。でも、今は家にトイレがある。1日に2回トイレを掃除するよ。生活に欠かせない大切なものだからね。」



【カルロス家の子どもたち】

「経済援助」と聞いて、私たちがまず連想するのは、「貧しい人へ現金や物を与えること」ではないでしょうか。でも、ユニセフ職員はただトイレを村に持ってきたのではありません。村人に自分たちの手でトイレを作る方法を学ばせたのです。

13年間の活動の結果、13万4千人の人々がトイレを使えるようになりました。衛生状態が改善したことで、5歳未満で死亡する子どもたちの割合は、25%減少しました。

ユニセフの報告によると、今現在、世界人口の3割の人々がトイレのない生活を送っています。そして、毎年800人を超える子どもたちが下痢をとまなう伝染病で命を落としています。トイレさえあれば救える命です。このような世界の現実を知り、「真の援助とは何か」について考えてください。そして、自ら行動する人であってください。

#### ★ 保護者の方からの感想 ★ 9月「人生は自分でつくるもの、遅いということはない」

- ・「カーネルおじさん」のあの笑顔の裏にはこんなにも波乱の人生があったとは・・・！まさに“大器晩成”のお手本のような方だったんですね。そのような人の言葉「人生は自分でつくるもの、遅いということはない」は、親世代にもグッときます。いくつになってもチャレンジ精神を忘れずにいたいものです。
- ・くじけそうになるときが何度訪れても、あきらめずに自分を信じて、やる気を忘れなければ、何歳になっても人生に終わりはないと思いました。毎日毎日自分に正直に前向きに生きてほしいと思います。
- ・何歳になってもあきらめない気持ちをもつことはとても大切だと思いました。自分が“やろう！”とすること！子どもにもその気持ちをもって何事にも挑戦してほしいし、自分もそうしたいと思いました。
- ・心から「やろう」と思ったことを信じて頑張ることの大切さが伝わりました。「人生は自分でつくるもの、遅いということはない」、本当にその通りだと思います。未来ある子供たちの心に響いてくれるといいなと思う。大人になった私の心にも響きました。(紙面の都合上、感想の一部のみ掲載しています。ご了承ください。)